

統一

第七十二號

民國十一年七月十四日出版

(一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十) (十一) (十二) (十三) (十四) (十五) (十六) (十七) (十八) (十九) (二十) (二十一) (二十二) (二十三) (二十四) (二十五) (二十六) (二十七) (二十八) (二十九) (三十) (三十一) (三十二) (三十三) (三十四) (三十五) (三十六) (三十七) (三十八) (三十九) (四十) (四十一) (四十二) (四十三) (四十四) (四十五) (四十六) (四十七) (四十八) (四十九) (五十) (五十一) (五十二) (五十三) (五十四) (五十五) (五十六) (五十七) (五十八) (五十九) (六十) (六十一) (六十二) (六十三) (六十四) (六十五) (六十六) (六十七) (六十八) (六十九) (七十) (七十一) (七十二) (七十三) (七十四) (七十五) (七十六) (七十七) (七十八) (七十九) (八十) (八十一) (八十二) (八十三) (八十四) (八十五) (八十六) (八十七) (八十八) (八十九) (九十) (九十一) (九十二) (九十三) (九十四) (九十五) (九十六) (九十七) (九十八) (九十九) (一百)

目次

日蓮上人の警句(承前)
 鎌倉時代の人情
 日蓮七八に對する感想(其一)
 日蓮上人に對する感想(其二)
 研學の態度に就て
 夏期講習會開催の事由
 報道廣告等

大僧正 本多日生
 文學士 川上多助
 文學博士 三宅雄次郎
 高島平三郎
 井村日威
 記者

日蓮上人の警句 (承前)

本多日生 口述

石川顯隆筆受

次に録内十四乙御前抄に

大覺世尊代らせ給ふ

と仰せられた警句があるが、これは誠に尊い聖語であります、全体乙御前といふのは池上の娘で十三才の時佐渡へ渡つて雪中の上人に奉仕した有名な少女でありまして此の御書は其の母御へ御遣はしになつたもので實に有がたい御調誡の澤山ある御文章であります、其の中に今の句の意味は、上人の御信仰の正系が合蓋して居るのであつて苟くも上人の門下に屬するものゝ決して輕視してはならぬ要點であります、此の句に顯はれて居る上人の大信仰は、人格的大覺世尊を信じ、自力的に出でずして大慈大悲力に依りすかつたる信仰の狀態であります、近代の日蓮門下の人々は上人の御主義は自力に依つて功德を得るのであると考へて居る

者が多い様であるがこれ等の人々はこの上人の警句を充分味讀せんければなりません、この警句は眞に佛教の神髓をついた限りなき眞理であります、元來佛教の一大宿弊は、この活ける信仰の對象を逸して多佛散漫の思想に沈溺して居る點にあるのである、又我が日蓮門下が世間の多くより殆んど天理教や蓮門教と同一視されて居るのも實に此の信仰の正系を逸して、鬼子母神や、帝釋や、稻荷の如きものを信仰對象の中心として淺薄なる現世の祈禱などを盛んに鼓吹して居るからである、苟くも上人の門下に列するものは此の聖訓を奉じ奮進努力して純潔なる信仰の發揮に努めんければなりません、信仰に就ての警句はまた澤山ありますが此の位で置いて、次は安心上の警句に就て御話することに致します、

信仰と安心とは非常に密接な關係を有して居る語で殆んど一物を兩面から眺めて居る様な有様のものがあります、然しながら、しいて區別すれば信仰は原因で、安心は結果である、つまり信仰の出來上つた時を安心

と云ふのである、この關係を一つの山へ登ることに譬へて見れば、麓より絶頂に到るまでの間が信仰で頂に達した状態が安心であります、又之を寺に譬へて云へば信仰はこの妙國寺と云ふ様なもので、安心は其の中心なる本堂と云ふ如きものであります、安心上の譬句では最初拜讀致しました、崇峻天皇抄の一節に

こぎこひての舟こぼれ

と仰せられてあるが、是等は最も大切な譬句であります、これは、一度安心の決定したものが、再び退轉する様なことがあつてはならんと云ふことを譬へて仰せられた語であります、信仰と云ふものは今身より佛身に至るまでとある如く退轉なく倍々向上せなければならん筈のものである、然るに多く東國人の氣風として信仰は一時は非常に熱烈であつても少したつと稔め易い傾があつていけない、信仰に火の信心水の信心と云ふことがあるが、一時に熱して忽ち消ゆる火の信心てはいけない、水の信心でなくてはならん、水の信仰とは河水の滾々として絶間なく流るゝ如き有様の信仰であ

もこの寒氣を堪え渡がされば、我が最も樂しく感ずる一陽來復の春は來らぬのである、法華經の信仰が丁度之と同じで困難ではあるけれども、この正しき信仰を退轉なく繼續するならば、やがて人生不老の春に相遇する事が出来るのであります、この冬の如しと仰せられた譬句に大なる訓誡があります、冬の中でも大寒は非常に寒いのであるが、草木を見れば最早芽を出さんとして居る、法華經の行者もそれと同じで困難の中に然も愉快の芽を出さんとして居るのであります、一休世間の弱者は兎角世の中事勿れと云ふが、そんな事ではだめである、昔から國乱れて忠臣顯はれ、家貧くして孝子出づと云はれてあるが實に其の通りであります二十四孝を見ても、親が貧乏で蚊帳を吊ることが出来ないとか、病氣で居て寒中に筍が食ひたひとか云ふ非常な場合に至つて始めて孝子の徳が顯はるゝのである我國無二の大忠臣と仰がる、楠正成の出たのも實に國家が危急存亡の秋でありました、之と同様で人間の精神も眞の勇氣は困難に打勝つて始めて出るものであり

つて之が最も尊いのであります、此の御書を御遣はしになつた、四條金吾も關東の人で、非常に勢のよい人でありましたから、一時は非常な勢で信仰するがどちらかと云へばやはり時々あきの來る傾のあつた人と見えます、それ故上人がこの御書を御遣はしになつて戒められたのであるが、これは單に四條金吾一人の爲てなく關東人一般へ御遣はしになつた御書と見て宜しいそれで「こぎこひての舟こぼれ」とは船が海中で難船せんとする時、種々な困難を凌いでやつと岸近くこぎ付け僅かな處に至つて船を破るならば寔に残念な事である、信仰も丁度其の通りで今まで續けて來たものを僅かな所て捨てるなら折角今までなして來た信仰が水泡に歸してしまふのであると云つて戒められた譬句であります、一時に熱して忽ち冷ゆる傾がある人々はこの語に依つて反省せなければなりません、次は妙一抄に法華經を信ずる人は冬の如し、冬は必ず春となる」と云ふ句があります、この意味は、冬は風が吹く雪が降る實に一年中の最も寒い苦しい季節である、けれど

ます、古今東西の英雄とか偉人とか云はるゝ人の傳記を讀んで見ても解る凡そ困難を凌がずして成功した人は如何なる方面にも只の一人もないのである、艱難汝を玉にすると千古の格言であります、之と反對に逸樂は其人の精神を腐らすものである、此頃の青年は徒らに金力を欲し順境を願ふて居るが、そんな懦弱な精神ではとても大人物になることは出来ない、殊に人として最も貴重なる節操と云ふ様なものは困難に遇つて始めて解るものであります、古人も「年寒ふして而して後に松柏の青きを見る」と云つて居るが實に味のある言葉である、信仰も之と同じで只信心して居れば安樂であるとのみ思つて居るならばそれは間違である、「こぎこひて」「冬の如し」皆困難と戰ふ意味の語であることを深く味はねばなりません、又四條抄に

苦樂ともに思ひ合せて南無妙法蓮華經と唱へ居させ玉へ

と云ふ譬句がありますが、これは楽しむ時には信心が出来ぬが、苦しい時には信心は出来ないと云ふ様な事

てはだめだ、信心は如何なる場合にも決して怠つてはならぬと仰せられた聖語である、人間には生老病死とか、會者定離とか云ふ、種々の苦痛があつて之は如何にしても通るゝ事の出来ないものであります、又人生には之等の苦痛に對して安樂と云ふものがないでもない、然しながら是等のものは、苦痛でも安樂でも、皆一時的のものであつて、決して永久不變のものでない隨つて無上の快樂と云ふものは是等の中には勿論ない筈である、先にも云つた如く、宗教の安心はこの人生の苦樂を超越するのであります、吾人は宗教の信仰を得てこの地上の人を超越して法界の人とならなければなりません、善量品に「我此土安穩、天人常充滿、園林諸堂閣、種々寶莊嚴、寶樹多花果、衆生所遊樂、諸天擊天鼓、常作衆遊樂、雨曼陀羅華、散佛及大衆とあり、觀心本專抄に「今本地の娑婆世界は三災を離れ四劫を出たる常住の淨土なり、佛既に過去にも滅せず未來にも生ぜず所化以て同體なり」と仰せられたこの境界に住するのであります、こゝに至つて始めて、眞の

安樂を得ることが出来るのであります、新様に人生を超越して考へて見れば、世上の苦樂は比較的のものであつて決して絶対のものではない、例へば地上には貧富賢愚美醜等の別ありて、暫らく苦樂を異にして居ると雖も、地下六尺を下れば最早そこには何の差別もない、如何なる大福長者でも、亦如何なる非人乞食でも墓地に入れば同じ事である、只僅に其の上に置かれてある石塔に大小がある位のものである、故にこの人生に於て苦の一面を觀じて悲哀に傾くのも愚てあれば又只徒らに現代物質の人生に酔ふて淺薄なる樂天的の考に耽るのも無論いけない、只苦をば苦とさとり、樂を樂とさつて、其處に大なる信仰生活に入り、宗教の大安心に住して本佛と俱に樂しみ、本佛と俱に働く底の無限の法悦に浴することが尤も肝要なることと思ひます、最早時間がありませんから今日はこれて終りを告げて置きます。

鎌倉時代の人情

文學士 川上多助君 講演

本日は三上博士が當番の講演をなさる、御相談になつて居つたとか、申すことであります、修史局の編纂事務や其他いろ／＼と御多忙で、出席することが出来かねるので、代つて私に何か史上の話をする様にとの御依頼でありました、それ故此處に出席いたした譯で、その講題は『鎌倉時代の人情』であります、私の談は諸君には關係が遠いかも知れませんが日蓮上人出現の時代を觀るには、多少の御参考に相成事と信じます。

鎌倉時代は京都と關東、公卿と武士との對立の時代でありまして、之等兩者の間には、思想感情風俗の差異あるは勿論、法制經濟の上にも各別様の事情が有つたのであります、然し概括して言ふて見れば、前者は平安朝の餘流を汲むものであるが、後者は新興の勢力で、事々物々範を後世に垂れて、武家政治の濫觴を

なす者である、而して政治經濟法制的武士的影響を示すは、謂ふまでもなく、京都に産する文學美術の如き權力關係の外に立つものにもありても、その多くは武士的の風向に化せられてある、故にいま鎌倉時代の思潮を論ずるに際し、前述の事由により、主として關東武士を中心として、辨明せんと思ふ。

崇神敬佛は武家の主眼とする所で、貞永式目にも、神社を修理し、祭祀を専らにすべき事、寺塔を修造し、佛事等を勤行すべき事の二條を以て、五十一條の冠首に記載してある、頼朝が兵を擧た初め、平家が僧侶の怨を買ひし前代に願ひ、成るべくこれが歡心を得んと欲し、三井寺を初め箱根三島等の社寺に、多くの土地を寄進したり、南都北嶺の歌詠に對しても比較的寛大の所置を把るを常とした、彼の東大寺の請求に應じて、平重衡を奈良に送りて殺さしめたるが如き、武士道の上より之を見れば、非難を招くべき節もあらう、しかし、他面より考察すれば頼朝自身も亦熱心なる佛教の信者で、擧兵の際には法華經一千部の讀誦を以て、

平生の素願となし居つたといひ、又た月毎の十八日には、幼雅の時より正觀音を安置し、放生の仁惠を専らにして多年を歴たるに、この十八日に旗擧の戦をするは、平生の所願に背くなりとして、多大の不便を犯して擧兵の日を、延引したといふことであるが、これ單に頼朝一箇人の思潮にあらずして、當時武士の間に一般に行はれたる傾向である。

平廣常が碩學の僧阿闍梨定象を扶けて、これを頼朝に薦め鶴岡の供僧職にした、また三浦義澄が殊に佛法に歸依して、前律師忠快を其の居住地である三浦の里に迎へたるが如き、また建久六年島山重忠が頼朝は従ふて上洛するや、母尾に朝惠上人を訪ねて、華嚴の奥旨を問ひ、出離の要道を求めた、

さらに彼等の心理を現はすべき一二の逸話を、語れば、岡崎義實の愛子義忠を殺したる、長尾定景を斬罪とする時、その高らかに讀誦する法華經の聲を聞いては、怨の念消滅して、遂にこれを殺すことが出来なかつた、下河邊四郎政義が所領の諍ひによりて、鹿島の

に發心出家して浴中に入り、群集の中に於て説法に餘念なかりし者もありし。

さて、鎌倉中で主なる神社は鶴ヶ岡八幡宮を初めとして、勝長壽院永福寺阿彌陀堂右大將家法華堂にしてこれには建仁二年各三人の奉行を命じて、管掌せしめた、當時僧徒の状態を考ふるに、その武裝をなし居りしは、僧侶一般の風俗でありて、かの實衡の殺されし時に、諸將が堂下に公曉を攻し際にも、門弟の惡僧等が内に籠りて、戦ふたことは吾妻鏡に載せてある、文曆二年鎌倉中の僧徒に對し、兵杖を帯びることを禁斷したが、その弊は依然として止まず、頭を裹み劍を横へて、市中を横行し、勝長壽院の如きは武勇不逞の輩を貯へ、甚しきに至りては三昧修行の僧等が、偏に酒を亂殺害相次で起り、その狼籍却りて武士の郎従に勝る者がある、寄進の所領は別當神主一箇知行して、私腹を肥やし、毫も佛道興行に及ぶものはない、鎌倉中の僧徒が慾に官位を諍ふことは、式目の禁ずる所であ

神職中臣親廣に訴へられし時に、鹿島は勇士を守るの神なり、争て怖畏の思ひなからんや、仍て所存ありと雖ども、故らに陳謝せず」といひて、一言の辨解もしなかつた、思ふに當時戰亂の間にありて、武士は幾多の事變に遭遇し、朝夕人生の果敢なき實例に接觸につけ、假令無邪氣なる武士も、その宗教心を動かす者多くありしならん、かの熊谷直實の訴訟に敗れて忽ち發心佛門にいり、下河邊行秀が那須野の狩獵における嗜れの場所に、一頭の鹿を射外した爲に直に遁れ去りて熊野に到り、入道したこともある、斯の如く當時の不思議なる入道の原因を深く考へて見るに、内巳に機縁の熱せるものが、一たびその機到れば直に繁類を念はずして、法の生活にあこがれた。

殊に承久の乱の如き、大事變に際して、後鳥羽土御門順徳の三上皇が、隔絶せる孤島に遷り給ひし事は、如何に心なき武士も浮世の機に心を動したてあるうか明月記によれば、關東の武士承久三年には戰場の人となり、次で順徳院に扈從して佐渡に赴きし人の、後

るにも拘らず、或は器量も謂はず若將と顧みず、恣に師範の讓ありと稱して一寺を管領し、或は病患に臨みて非器の弟子に附屬し、或は名代を立て世間を僞瞞し面してその利潤を貪ばることを、敢行して憚らざる醜狀を暴露するに至りた、泰時は令を出してその弊を矯めんとしたが、その効果は順應せず、時頼の時代には更に甚しく、裹頭帶劍は猶舊の如く、訴訟あれば嗷々狼籍を極め、神主別當は只佛物神領を貪ばりて、道のために端すの志なく、都鄙の神社は頽廢するも顧みず、幕府修復を命ずるも從はず、また法器を精撰にすることを企つるも、その職に補せらるゝの後は、多く淺薄の代官を用ふるために、嚴重の御願も此等脆弱を手代によりて、勤めた、故に一身にして數箇所の別當神主供僧職を兼ね、一鬼を逐ふ者は一鬼を得ざると同じく、すべて有名無實となり了はりて、諸社諸寺の祭祀漸く荒むの結果を招いた、また堂舎供養の人や報恩修善の家は、徒に名聞を好み淨信を忘れて、只奢侈を競ひ涯分を測らざるために、家産を失ふた者も多くある。

夫の弘長元年放生會に授數の儉約を令したを見ても漸く祭禮の華美に流れて來たとが知れる(吾妻鏡、式目)これ時々出された法令を補綴して記する所なれば、比較的的大勢を知るべき便利になること、信ずるのである之に由りて是を觀れば、從來佛教の墮落して破綻を生じ宗教の價値を減退せんとする、傾向あるは掩ふべからざる事實である、此の時に方りて關左の精神は、一革新を呈して新宗教の物典を見るに至つた、新御式目(弘安)の令に、寺社を新に造ることを止められ、古寺社に修理を加へらるべき事とあるは、恐らくは此等新宗教の流行の結果として要したであらう。

當時勃興したる新宗教に就て述べんに、禪宗の鎌倉に入りしは、葉上房榮西に始まる榮西は政子頼家の歸依を受けて、屢幕府に出入し祈禱供養の導師となりて恩遇に預かり、正治二年總谷の地に壽福寺の建つや榮西これに長老となりた、然れども榮西の禪に於ける頗る怪しむべき點がある、榮西の門人榮朝上野の長樂寺に於て、盛に禪風を煽ぎ東方の道俗趨化歸するようには

ある、今浄土源流章に依て、當時浄土宗のために東國布教の任にあかりし、諸僧を上れば、西山派の修觀長樂寺派の隆寛鎮西派の良忠、また三論の明哲にして浄土教をかねたる真空、隆寛の門人智慶同じく門人なれども破門を受けたる道觀等を、數ふるを得るが、その不評判でありたことは、前と異ならない、即ち延應元年四月の法令には「或は魚鳥を喰ひ、女人を招ぎ寄せ或は黨類を結び、恣に酒宴を好むの由、逼り風聞あり件の家に於ては、保々奉行人を仰ぎ破却せしむべし、その身に至りては鎌倉中を追却せらるべきなり」と、あるを見ても炳である。

しかく、禪浄土共に大に振ふに至りしは、泰時の末年より經時(在職)を経て時頼に及ぶ時代であるが、この時代にありては、鎌倉士風の變遷漸く動き、時頼時宗等の勵精治を謀るも、一代の趨勢は之を如何ともする能はず、彌々墮落の深淵に沈む傾きである、いま時頼以後幕府顛覆の時代までの、社會の事情を畧述いたさん。

元亨釋書に誇張の筆のあとあるも、鎌倉にありては榮西の後を受けたる、行勇に至りては實朝の寵を失ふて、禪風の宣揚に一頓挫を來した、その大に興りしは大覺禪師の東化によるのである、又念佛宗も關東に早く入り、これを信ずる者も漸々蔓延した、營中に於て天台浄土二宗の論を聞きしこともあれば、民間に於ても他宗と相排擠をなして、激烈なる競争を生じた状態を思はしむるものがある、武藏の國に於て天台の僧が、雙六に負て將に身の破滅をする場合に、念佛者がこれを償ふてやり、而して改宗を迫りしに、その償いへるには「縦ひ馬となりて繩つらつきて奥へは罷向とも、法華經を棄奉り一向専修には入るべからず」といひて、遂に其の助くる所とならない(古事)又家婢が念佛を唱へしとして主人怒り、錢を燒てその類に當たといふ鎌倉町の局の話がある(砂石)然れども念佛信者が不取締なる行動は、幕府の嫌厭を招き、正治二年頼家の代に、念佛宗を禁斷し僧徒を鎌倉外に、追放したされと追々同宗の、潰れると俱に他宗の者と相排擠する傾向を有して

源頼朝の治承四年始めて鎌倉に入るや、素る所邊鄙にして海人野叟の外、卜居する人少なしといひ、若宮造營を始めし時には、工匠を鎌倉中に求めて得ず、武藏淺草にこれを仰ぎし程である、然れども忽ち天下政權の中心地となり、將軍以下諸將の邸宅は軒を並べて相與され、四方の人民は争ふて此に聚り、蔚然として東國の一大都府となれり、南御堂永福寺の建立せらるゝや、彼には南都の大佛師の來りて丈六金色の阿彌陀を作り、陀麻爲久の畫圖を加ふれば、此には修理少進季長の京都より來りて、扉及佛の後壁に畫き、又僧靜立の指揮に従ふて庭石をあしらい、又一方には京都より來れる、遊子もその妙技をたゞへたなど、鎌倉の繁榮日を遂めて盛になり、斯くてその人口は建長四年に鎌倉中の沽酒を禁じ各民家に就て注する所の酒壺、凡そ三萬七千二百七十四口といへり、丘陵多くして平地少なき、鎌倉に比して人口の稠密なりし事を知るに足る、また永仁元年の大地震によりて、鎌倉中の山々谷々崩れて、ために死する者二萬三千二十四人に達し

た、泰時の末年の頃より漸く殷賑を呈し來り、寛元三年には令を布て、或は町家の漸々道を狭むるを禁じ、或は小屋を溝の上に作りかくるを停め、同二年を経て寶治二年には、府内商賈の數を定め建長三年には在々所々の小町屋及び賣買の設を禁じて、大町以下の七所に限りて、これを許すことにしたが、遂に文永二年には、屋前の大路を掘り上げて家を造るを禁ずると共に、散在せる町屋を止めて大町九所を以てこれに充た、之等の法令は裏面に於て、皆經濟の發達を示すものである、弘長元年には重事の外濫に早馬を用ゆるを禁じ、「變急あるの時は聞達をなせよ、面に近代に到り大事に非ずと雖ども、早速を以てその詮となすは、願者人馬の煩をなす」といへるは、偶々釋迦の事漸く繁雜を來したことが推斷せらるゝてある、また建長五年には薪炭等の價を定め、一件の雜物は近年高直にして法に過ぐ」といへるは、蓋し人口増加の然らしむる結果である、京都鎮西の商人等需に應じて、或は綾羅錦繡或は高麗支那の珍物を、關東に賣し來るものがすべて鎌倉

談物の名によりて知らるゝてある。
また鎌倉武士は、その初に於ては殆ど文學に通曉したる者なく、將軍の師となりし仲章の如きも、京都にては飛脚等の沙汰をなし居し者であるといひ、かの承久の役に上洛せし、東軍の中に於て勅書を讀み得るもの稀なりしといへば、文學に疎きことが了知せらるゝならん、然るに大平打續くと共に又文學に心を傾くる者多くなり、建曆三年に學問所を立て唐の十八學士に徵ひ、拾八人の文士を分ちて三番となして幕府の講席に侍せしめた、泰時仁治二年小侍所の番帳を改めて、手跡に堪へたる者を選り、正元二年早書番を定めし時にも、右筆の堪能者を加へたが、時類も亦心を同じうし幕府の近習に命じて、和漢の才を好むべきを論じ、將軍類副にも武藝の練習と共に、和漢の學問をすゝめた、且つ家人子息の中に於て好文の器量ある者を、撰て同學に候せしめた、殊に佛教の隆盛につれ、元僧の來朝は必らずや、鎌倉武士の間に文學の必要を感ぜしめたてあるう、則ち經論の翻譯行はれて、弘安二年に

は、秋田城介足達泰盛大日經疏を出版し、同じく六年には北條越後守顯時、傳心法要を刻し、翌顯二年には高師直の楞嚴經を出版した、就中北條實時は金澤文庫を立て、汎く儒佛の書を蒐め、同顯時の左傳、同貞顯の詳書治要の類は、尤もその愛讀せし所であるといふ、足利時代になりし書札作法抄には、「關東先代の時の奉行は儒學の稽古をせらるゝの間、よき程の文章に暗き事なし」と稱讚してある、然れども文學の發達鎌倉の繁昌は、必らずしも幕府の主眼とする所でなく、これを以て猶文學歌舞共に非職の才藝と稱し(東鑑建長六國五)殊に後者にありては、商人の員數式數を定むる精神を測れば、ために土風の敗類を來すを恐れしに依ると思はれる、而して武家の本領たる君臣の結托武藝の練磨質素の生活等に至りては、之を幕府草創の時と比較するに、大變化の跡を認め得らるゝてある、北畠親房が建武一統を論ずるに方たり、古今人心の變異を嘆じて左の如く謂てある

本第一の豪の者なりと書て給りてけり、一とせ彼の下文をもちて、奏聞する人のありけるに、褒美の詞のはなはだしさに、あたへたる所のすくなさ、まことに名をおもくして、利をかるくしけるいみじきことと口々にほめあへりける、いかに心得てはめんといとあかし、是までの心こそなからめ、事にふれて君をおとし奉り、身をたかくする輩のみまほくなれり、ありし世の東國の風儀もかはり果ぬ、公家のふるさ、すがたもなし、いかになりぬる世にかと、なげき侍る輩も有と、さこそしかど中一とせばかり、誠に統のしるし覺へて天の下、こぞり集りて都の中はへしくこそ侍りけれ(神皇正統記)
蓋し承久以來、兵を用ることなく泰時以來、執權善く政治に勤め、東國の勢威頗に揚り無事昇平の餘り、文化は愈々發達せりと、謂ふべきも、武士道の中心である所の武藝は、漸く廢れて一代の風尚動きはじめ、粗野を去りて閑雅となり、質素儉約を棄て奢侈淫佚に耽かんとする状態である、殊に元寇以後經營宜しきを得

又直實といひけるものに一所をあたへ給ふ下文に日

ざるため人心離畔した、貞時高時のいで職を襲ぐに及び、政治の紊亂士風の墮落は遂に收拾すべからざる難境となりた、されき斯く人心轉換したる最初の時期を求むれば、頼朝泰時の精神を得たりと稱せらるゝ、頼朝の治世に伏在してありたてある、時頼鋭意治を計り身を持する質素、以て衆を率い嚴令雨の如く降るといへども、人心の動搖は遂に止ない、若し夫れ委細に東鑑を讀み來りて、泰時を送り時頼を迎ふれば、この時勢の變化は容易に注意を惹くてある、政連諫草にも、隨て關東に於ては右大將家の代より、前の武州幕を鎮むる時にいたるまで、恭儉ありて奢靡なし、其時を以て上代に稱ひ難しといふも、彼蹤を履む宜しく中興を被らしむべし。

「前の武州幕を鎮むる時にいたり」といひ、「中興」といひ、共に時頼以後の變遷を示すものである、泰時に至るまでは、將軍の源氏たる否とを問はず、幕府の中心となりしものは、頼朝及びその遺制でありて、諸將は右大將の建てし幕府を保護維持することを考へ、

所たる大慈寺や、頼朝が佐奈田義忠のために建たる山内の證善提寺は、共に荒廢の運命を免る能はざるは、寧ろ當然の趨向であらう、越へて貞時の時代に至りては、勝長壽院の荒廢愈々甚しく、「昔炎上して雨度に及びしむ、今本に復せず多年を送る、冥慮測りがたし」(政連) (未完)

左は天晴會第四例會の講演筆記なり元と無關係に課題を設くるのみ
文責は例に依り記者にあり

日蓮上人に對する感想

三宅雄次郎君 講演

無理に何ぞ言へと言はれまして……無現でなくとも申すことは出来ない……是非立て、言ふ事が無くても宜しい……と本多さんが云ふのです……本多さんが此處へ出られる所であるが、病氣で困ると云ふ、ドレ見ても病氣とは見へないのでありますけれども……病人が、たつて出ると言はれて正直者か此處へ出た、

頼朝没して、日に數代を経て泰時の如き華堂に上らず、人これを勵むるも御在世の時すら左右なく堂上へ參らず、堯御の今何ぞ禮を忘れんやといひて應じなかつた、時頼義親の翌年三浦黨の叛事傾し時、光村が要害を頼んで永福寺に、相かんとするを斥けたる泰村は「縦ひ鐵壁城郭ありと雖ども、定令通るゝを得ず、同じくば、故將軍の御影の御前に於て、終を取んと欲す」といひしが如きは、當時の思潮の猶頼朝に對する崇敬の情の、深きを知り得らるゝてある、然るに時頼の藤原頼嗣を追ふて、宗尊親王を仰ぎて將軍となすや、親王と源氏とは何等の關係はなく、親王の尊は輒く行啓すへからずと稱して、前々の將、鶴岡八幡の臨時祭には必らず參詣ありし例を改めて、以後之を廢し御奉幣には、別に使を立てることにした、(經東)一神事の小なる事柄も、これによりて武士の頼朝に對する感想の、變化を透見せらるゝである、已に建長三年に於て源氏の氏寺たる、勝長壽院は「近年破壞に及び其跡已に改めんと欲す」(經東)といひ、源氏累代の御祈禱

是れと言ふ事も無いが幾分の思ひ附はある、然し研究はない、其の思附と云へば、日蓮上人の如き人物が、後世出て居るかドレかと言ふことになりますと、ドレ丈か似た人はある、シテ其人が……先づコチラの東の方から出て居る、餘り西の方からは出ない、これに就ては種々の事情もあるだらうが、先づザット申しますと……日蓮上人は偶然に顯はれた人ではない、ドレ丈か東全體の人の氣質がはいつて居る、調べて行けば人種の上にも歴史上の變遷の上にも、色々の事實があるてせうけれども、東の人は一種其性質が荒びて居る……其れが開けて來る程柔らいて來る……開けて來ると其の特質が感じて來る、東の傑出した人物には、殊に著るしく現はれて來るので、當年鎌倉の人は皆上人の如き性質を幾分か持つて居たようだ……上人は鎌倉文明の及ばざる田舎から出た人である、同じ田舎から出ても、力ある人が現はれるとツマリ上人の如くに成る、其の後に現はれた人でも段々と都じみた事があつても、ドレ丈か上人の様な事が見へる、後に

色々現はれた人があるが……又徳川時代にもある普通以上に世間に卓出した人は、概ね上人の如き性質を帯びて居る、平田篤胤とか、佐藤信淵とか云ふような人は、一方には上人と大に異點はあるけれども、大に似た處がある……妙な骨ツシのある所が似て居る高山彦九郎、藩生君平などは、人柄は違ふが、ガンと事を透す所がある、それから林子平も大分違ふが、利害を飛び越えて、自己の信する所は断行しようとする、西の方にも力がある人がある、世に影響を及ぼした人があるが、即ち西には、平田や高山は出ない、吉田松陰の様な人は出たが、チョット人の質が違ふ、ゲンと出て利害の打算已上に先づ断行せんとするよりも、周圍の事情を見て其れに應ぜんとする傾向がある、東の人は、新に事を爲すの人は、一身の利害よりも信する事を行はんとするが如き風があつて、これが極下の方へ下つて来れば、例の江戸ッ子となる、江戸ッ子となれば現在丈であるが重にも職人丈に行はれて居る、江戸が開けて、旗本が力を失ひ、仕事師をやる者に力があ

らはれた、仕事師は利害よりも思ひ込んだ事は、水火をも辞さないで辛抱強くやろうとする……職人などもソレである、東の方では自分の思ひ込んだ事はドコ迄もやると云ふ力が、然諾を重んずるとか信じた以上はヒルマヌとか其他善い方に現はれて居る、西の方は信じて居てもイロ／＼切り盛りをして遂に全く違つた様になることもある、東の方の開けない特質が發達すれば、上人の如き人が現はれる、鎌倉已後でも傑出した人は能く上人に似て居る、開けた方からは種々の關係の爲めに上人の様な人は出ない、却て影響を受けな土地からは出る、今でも東の方で多少事を爲す人は幾分上人に似て居りはせぬか、信じて行ふ人は東西にあるだろう、又東の方にも移り替わる人はあるには違ひないが、多く露骨に見える、トテモ上人の氣品の例には當らないけれども、アノ工藤行幹 一名を珍念と云ふ人物なども、侃々諤々の風があつて上人に似て居る様な處がある……即ち一本調子の様な所が……ドローして東西に分れたかは色々又研究すべき事もある

だろうが、東の方の性質の特徵としては、ドローしても上人の如き性質があると認めて差支はない、上人の如きは、開けない土地より出て、開けた處に其特長を最も能く發揮したものはあるまいか、人の種々の性質を尋ねれば、今少し考へ方も有るだろうと思ふが、一向調べた事はなし……事に依つたら調らべたいが……調べ得られるかドーか分らん……今夜はホンの思ひ附て、是れ以上強いて云へば価値の無い事に成つてしまふ……本多さんの病氣と私が無理に話すのと、ドチラが軽重があるか……そこは宜しく皆さんの判断に……

こゝも亦三宅博士に引き續いての無題講話にして記者は假りに博士と同一の講題と爲せり

日蓮上人に對する感想

高島平三郎君 講話

只今三宅さんの御話しを伺つて、私も感じた所があり、ますます少しく御話し致します。

先きに食事中、何人か「上人はドウしても釋迦が生れ替つた」と言ふ人があつた、此の如きことは、自分は頗る興味を持って居るものである、段々調べて諸君の御意見を聞きたいと思ふ、人は肉体を持つた個人としては、何故に上人が再來であるかと云ふ様な事は、學問上説明することは出来な

い、道理上より云へば、佛陀は無始無終のもので常に此世に存在して居る、吾人は佛性を持つて居るから、法華經を持つて之を開發すれば佛に成り、無始無終の佛と同一の覺體となれる譯である、此の原理は哲學上に云ふ現象即實在論で、元來が煩惱即菩提生死即涅槃であるから、上人が自ら呼んで釋迦の再來だと云ふても、別段不思議は無い、吾人と雖本有の佛性に順じて働くならば、此處に釋尊の人格に其まゝ、如同したので、之を釋迦の再來と云ふても差支はあるまい、然し釋迦の再來が云ふと云ふと甚だ迷信の如くに見えるが、其實道理上から言へば、何人でも言ひ得ること、唯上人は

新信仰を鼓吹し佛敎中の純粹なる教理を主張せられたからして、これが爲め非常に自ら信ずることが強かつたのである。

全宇宙法界は、佛陀の顯現攝理と云ふ點から言ふならば、下方空中より本化上行菩薩が出たと云ふことも何等の不思議は無い、イツデモ必要があれば、出て来る譯である、社會學の上でも、社會は個人の集合團體で、面も又、社會の現象は、總て人間の欲求に應じて現はれる、即ち人間の最大欲求のある所には最大偉人が現はれて來ると言ふ、此の意義より言ふならば、上人の如き御方が、當時に顯はれ來つたのは、時代の必要に依て出現したのである、之を佛勅に依て出たと云ふても、佛敎を蒙りて上行の再來として現はれたと云ふても差支はない。

三宅さんの只今の御話しは、東日本人西日本人と云ふ着眼より、上人を人間として觀察せられたのであるから、私も此點から少しく私見を述べて見ると、關東西の區別より見れば、先づ法然親鸞の如きは、關西を代

殊に感深いのであります、これは又他日御話し申上る積りである。

我れを忘れる即ち無我と云ふことに二通りある、一つは前に言ふた様な逆境失意の境に立つ場合で、猶一つは、偉大なる信仰が體現せられたる場合である、上人の性格は、二つに分けることが出来る、それは「日蓮は旃陀羅が子なり」と云ふ様な、非常に謙遜の方面と、「我れ日本の大魁とならん」と云ふ様な傲慢に見える方面がある、是れは、過般境野君も申された様に、四月號の統一にあり、我が五尺の肉體の果敢なきを觀じた時は、實に非常に謙遜なので、ソレカラ傲慢とも見えるの時は、法華經が顯はれ理想が滿身に有るの時である、此時に我を忘れる、是れが南無であるのだ、軍人が戰爭する時、役人が一心不乱に事を執るの時、ソコに我れを忘れる南無がある、

上人が法華經に南無するの時は、肉體の上人は無い、五尺の小天地皆是れ活ける法華經の體現である、斯る偉大なる人格の顯現は、是れ逆境に處するより生ずる

表し、上人は關東を代表して居ると思ふ、前者は意志の力よりも、智力が強く、後者は寧ろ意力を以て勝つて居る、純信仰は意方に依るものである、是れは開けない田舎の地に多い、三宅さんの言ひし如き、日蓮上人に似た人々は、色々の關係もあるてせうが、境遇即ち失意の境に在る次に多い、即ち一事業を爲さんとする人は何處かに上人の面影を忍ぶ點がある、

上人程自我を圓滿に顯された人は無い、何處へ到つても他人を感化した、是れは順境にあるより逆境に立つた時、即ち思ふ様にならぬ時に尤も能く自我が顯はるのである、近くは政黨などが、順境に在て萬事思ふ様になるとソコ自我を忘れる、日糖事件などは最も好い滴例である、上人の御一生は三類の強敵に攻められたところの悲風慘憺の生涯である、

斯る中に在つたれどこそ、尤も完全に自我を發揮したのである、吾人でも、上人の如くに迫害を受けて思ふ様にならぬ時、即ち吾人が不足の念ありてこそ、殊に上人を懷仰するの念が、彌増するのであつて、私などは

のである。

私は少年の頃より、常に逆境に在つたもので、死せんとした事も度々ありました、然し「難無汝を玉に成す」と云ふ様な譯で、斯る失意落膽の境遇が、人を作るものであるとは、人からも書物からも見たり聞いたりしたことがあるが、種々御振舞御書開目鈔等の上人の遺書を拜讀して、殊に痛切の感を感じゆる次第であります……ソレして上人の一生が活ける法華經の顯はれてあるなら三宅さんの申された様な日蓮上人に似た人々には、廣い意味で言ふならば、皆一部分の法華經が現はれて居ると思ひます……(文責在記者)

本篇は大學林同窓會(四月例會)に於て講演せられたるものを筆記したるなり、未だ校閲を得ず、文責筆者にあり

研學の態度に就て (其二)

井村 日 威 講演

中原道雄筆記

先日は研學の態度に就てといふ題で聊か演べて置させ

したが、本日も矢張り其中の一部として、祖書研究に就て、注意すべき點を簡單に述べやうと思ひます。

一、祖書の對照研究

現今日蓮聖人を研究するものが非常に多くなつて参りましたのは、實に結構なとてあります、が然し一方には又日蓮聖人を誤解するものがありはせぬかたう恐れもあります、その所以は、日蓮聖人の御遺文を拜讀するものが、各々勝手の見解を下して居つて、それが果して日蓮聖人の本意と同一であるか否かと云ふこととあります、日蓮聖人を研究するには、先づ日蓮聖人の御書を研究するとは勿論のことであるが、全体日蓮聖人の御書は、文章が極めて平易であつて、ザット通讀すれば何でもないやうである、所が之れを深く研究すれば研究する程六ヶ敷く感じて來る、日蓮聖人の御遺文の文面は、極めて容易く何でもないうてあつても、而も其中に種々な深い意義が含蓄されて居る、又全じ事柄を説かるゝにも諸方面から述べられてある、或時は對告者の機に隨つてそれに相應した法義を説かれて

あることもあるし、或場合には自己の眞意を發表され

たこともあるし、或は又世間通途の説に順じて示されたこともある、かくの如く其述べられたことが、或は深く、或は淺くして、往々其間に矛盾があるかのやうに考へらるゝ所がある、然し日蓮聖人の御書には、矛盾を來す箇所は決してないが、之を拜讀するものが研究の及ばざるより往々かかる衝突點があるやうに思はるゝのであります。

かく一度拜讀した時は何でもないやうであるがダンダン深く意義を考察して讀めば、前後衝突杯が出來て、解決がつかなくなつて來る、それであるからして、御書をボンヤリ讀んだのみでは、到底日蓮聖人の眞意義が了解し意識されない、世間一般の人が讀む様な心得では充分解らない、そこで日蓮聖人の御書を研究する上に於て、尤も必要の條件としては、祖書の對照研究である、祖書の一涌毎に、其述作の年月、對告者、著作の時の事情、等を能く考へて、其書の位置を研究して適當なる判斷を與へねばならぬ。

古來御書を研究するに就て、佐渡前と佐渡後との法門の相違があるといふことは、祖書研究者の第一歩に於て教へらるゝ處であつて、日蓮聖人自ら三釋抄(内十九)に

法門の事は、佐渡の國へ流され候ひし以前の法門は但佛の爾前の經とおぼしめせ、

と申されてあるのだから申すまでもない事である所が祖師自ら、佛の法花經の如しと云はれたる佐渡後の祖書に就て中々一定しない、我宗の高等教義たる方面に於てこう云ふことがある、今其一例を擧ぐれば、信行門……即ち天台の法行門と異り、觀念觀法を修するを取らず、口に題目を唱へ、心に佛を念じて修行する……に就て四信五品抄(内十六)には、

佛正しく戒定の二法を制止して、一向に惠の一分に限る、惠又堪えざれば信を以て惠に代ふ、信の一字を詮と爲す、

とある、此文を以て見れば、末代に於ては戒定惠三學の修行は、實行し得ないから、之れに代ふるに信を以

とする、所謂以信代惠の説は止むを得ず信行を許すのであると説かれてあるやうである、此以信代惠の法門は非常に重要な教義として説明せられてあるのではありませんが、立正觀抄(内二十八)を拜讀すれば

本地難思の境智の妙法は迹佛等の思慮に及ばず、何に況んや菩薩凡夫をや

とある、是れに由つて見れば、菩薩凡夫所でない迹佛でさへも思慮の及ぶ處でないから、其以下のものが、ドーコーと智恵を振廻すことは出來ない、唯信仰に依つて、此不可智の境界を識り得らるゝのみであると申されて居ります、此兩抄の意味は、非常なる相違がある即ち四信五品抄では、止むなく信を取るといつてあるに反して、立正觀抄では、迹佛等の思慮の及ぶ所でない、假令、世界に如何なるエライ人が出て來ても、本地の妙法を思慮するとは出來ないと申されてある、故に此間が下しても衝突して居るやうに見える、本尊抄(内八)に示されてある所の

一念三千を識らざるものには佛大慈悲を起し、妙法

五字の袋の内に此珠を裹み、末代幼稚の頸に懸けしめ玉ふ、といひ

釋尊の因行果徳の二法は、妙法蓮華經の五字に具足す我等此五字を受持すれば、自然に彼因果の功徳を譲り與へ玉ふ

といふ文は、立正觀抄と全意味である、此兩書の議論の相違致して居る點は、是れ會通して置かねばならぬことであるが、此れを會通するには、兩書の位置を比較して判斷せねばならぬ、此兩書の位置を比較對照して、何れが主なりやといふことを考へたならば、教義上何らの議論が主たるべきものであるといふことは、直に分る、御書中には此他之れに題する點が餘程ある、それ後學の徒が徃々混同し曲解して聖人の眞意の存する所を没却して居るものがある、又は異りたる議論を會通もせずして喋々と辨じて居るものもあるのである、コーニエ次第でありますから、吾人宗學を研究するものは、唯だ祖書の一部を見て、それで完全なる意

其の多くは俗男俗女に與へられたる御妙判であるから恰も普通一般の人々が書面の徃復をなすやうなものである、然し中には著述的に筆を執られたものもあります、それが極めて僅かなもので、其大多數は消息文である、従つて意味は文面に表はれて居るから別に末釋の必要は殆んど感じない、但し處處に重要な教義などがあつて解釋に苦しむ所も全くないではないが、大体に於て、解釋し易いと云ふてよいから、末書に據る必要がない、所が其末書は實に多い、若し末書を一々讀むならば、到底之れを讀み盡すとは出来ない、それに末書に又末書があつて、それこそ大變である……一寸位の書物も之を叙述すれば三寸位にはなるし、之を又附け加へて解釋すれば五寸位の書物となる……かく末釋に末書があるので一々見て居る中には、益々複雑になつて來て却つて本文の意を没却する恐れがある、従つて、信仰を養ひ得らるゝ點から申しても、末釋に余り拘泥せぬ方がよいかと思はれます、且つ又末書も多くは前後の聯絡が失して居るとか、會通を加へてな

識を得たものとするとは出来ないに依つて、こゝに對照研究の必要が生じて來る、即ち宗祖の本意が何邊に存するかを見る爲めに、諸御書を比較せねばならぬ、此點から申せば、教科書として或一部の御書を選びて用ゐて居るのは、余り感心したことはない、ドーしても之れに適切なる教科書がなければならぬ、然し今日の所ではまだ一定の教科書として出來て居ないので、止むを得ず現今の如き教授法を執つて居る次第である……一昨々年發行された華語録は、餘程此點に注意されてありますから、其内容は聖人の眞意を會得するに極めて適當に組織的に編成されてあるやうに思はれます……そこで諸君が祖書を研究するに就ては、此比較研究の態度を以て綜合的に見るといふことが最も必要なる條件と思ひます。

二、末釋に拘泥する勿れ

次に祖書研究に就ては余り末釋に拘泥するとは宜敷なと思ふ、日蓮聖人の御書は、信徒に與へられた書で、特に専門的智識を有つて居たものも極めて少かつた、

いと云ふやうな譯で、末釋を見れば見る程、意義が取れないことがある、尤も種々なことが、列記されあるのて物識りになるには都合のよいか知らんが、物識りになつた所て唯知つたといふのみでは何の必要もない、そののみならず、末釋には餘計な無理な解釋がしてある爲め、却つて眩惑される恐れがある、其一例を擧ぐれば、開目抄上(内二)に、

一念三千の法門は俱法華經の本門壽量品の文の底にしづめたり、

とある文を解釋するに、何でも文底とあるから何處かに底があるに相違ないと思ひ、達二無三、方便品の開佛知見の文であるとか、十如實相が即ち壽量の文底である杯と、無理に解釋を附せんとして居る、然るに、日蓮聖人は明白に本門壽量品と示されてある、それを曲解し理屈を付けて、迹門を以て意義を表はさんと力めて居る杯は、實に牽強附會なる説で日蓮聖人の本意は決して迹門を以て解釋せなければ一念三千の義が成り立たぬといふ意は寸毫もない、文に既に壽量品と示

されてある、それを後世のものが、トンデモナイ所に底があるかの如く釋して居る、斯んなことは何の益もない、否却つて迷見の媒介者となるのである、殊に日露の著した『啓蒙』の如きは、唯種々な説を列擧したのみであるから、充分法義を知らないものは却つてマゴツクとが多い、故に直接御書を拜讀して其眞意を得ることに心掛くるが最も必要なると思ふ。

上來述べました通り、祖書研究に就ては、以上の二點が最も注意すべき件であると思ひますから御話致した次第であります、
(完)

將に開かれんとする

天晴會夏期講習會

△來れ天下求道の士よ

△來て聖祖鑽仰の福音に接せよ

我等同好の士、先きに聖日蓮の大主義大人格を鑽仰するの志を以て、天晴會を組織するや、天下の視聽翕然

本化高遠の慈光に浴せよ、

言ふまでもなく鎌倉の地たる、六百年前聖祖獅子吼の跡にして、七里ヶ濱邊に岸打つ波は、鼓々として今猶は折伏毒鼓の響きを傳へ、處々に散在せる幾多の靈蹟は、皆是れ法華身讀の聖境、足一たび此の地を踏む者をして、低徊顛望、身毛悚然として、高年救護の大慈悲に感泣せしむ、況や講習會場たる龍口寺は、聖祖四大陸難の遺蹟にして、日本國の中には鎌倉龍口と言ひし處なり、斯る靈地に在て、各講師の熱心至誠なる聖祖鑽仰の福音に接す、歡喜充徧身の感、眞に無限ならん、來れ熱誠渴仰の志士、來り會して以て、此無限の法悅を共にせよ、

從來世に多くの夏季講習會はありき、されど今回我が天晴會主催の夏期講習の如きは、恐らくは空前の壯舉なるべし、十有餘名の講師皆是れ當代の名家、悉く我會員にして至誠敬虔なる聖祖鑽仰の同志なり、世の何時間幾何といへる切實の講師に依て吐き出さるゝ血なき熱なきものと日を同して語る可きに非ず、我同志の

として是に向ひ、或は書を寄せて月次の講演を公開せよと通り、或は講演録を出版して天下の渴望を醫せよと告げ、或は頻に會員たらんことを申込むもの、支部を設置せんとするもの等、殆んど應接に追あらざらんとなす、嗚呼是れ物質的惡文明に厭倦を生じたる時代必然の要求に非るか、世上幾多の煽動主義の成効論や、寂滅主義の消極的安心や、薄弱なる修養説等に飽き足らずして、眞乎に根底ある偉大なる本化の靈光に浴せんとする求道熱の勃興に非る乎、見よ、天下到る處に渴者あり頻りに清涼の水を求めて止まず、見よ社會の各方面に餓者あり大聲を放ちて食を求めつゝあり、此の時に當り「進ンデ上人敬慕者ノ善友タランコトヲ期ス」と標榜して起てる我天晴會たるもの、豈に多少の設備なかるべけんや、然り天晴會は前途幾多の抱負と設備とを有す、先づ其の第一着手として、熱烈なる天下求道の士の爲めに、七月廿一日より向ふ十日間を期し、相州鎌倉片瀨に夏期大講習會を開催するに至りぬ、來れ同門の四衆よ、會せよ求道の志士、來り會して、

會員たる斯くも多數の講師が、風光明輝にして而も事寂光の靈域たる湘南の勝地に相會して、天下求道の士の爲めに、各自の蘊蓄を傾けて、誠意鑽仰の熱血を激がんとす、其の組織に於て内容に於て價值に於て將又敬虔の態度に於て、空前の夏期大講習といふも溢美に非るべし、來れ千里同感の士よ、四方より集し來つて、此の勝境に三伏の盛夏を銷し、以て相海の波に俗腸を洗ひ、無前の大講筵に塵耳を澄ませ、敢て告ぐ矣、

報 道

尙風會記事

尙風會大原支部發會式

戊申詔書の煥發に先だち發芽し戊申詔を信仰箇條とし箇人品性の向上社會風紀の改善を目的とする千葉縣尙風會は本年二月山武郡東金町に發會式を擧げ次いで長生郡本納、同郡茂原、千葉郡生實濱野、山武郡源村等支部の發會式を擧げ愈々九日を以て夷隅郡大原町に支部の發會式を擧ぐるに及べり大原町支部の會員は同町及同町附近の有力家二百餘名に達するの盛況にて例

により發會式の模様を略叙せむに、午後一時同町の醫師市原兼三氏は開會の趣旨として時弊救済の爲め尙風會の必要を演べ同支部役員の選舉につきては自己に其推選を一任せられたきを誇りて満場の快諾を得て其れに決し池田良江氏の戊申詔書捧讀ありて次に野口日主氏は千葉縣人と題し房州は下女を産し上總は情(丈)なき木綿を産する外に多くの特色なく九川男兒または東北男兒等の御國自慢に對し我々は上總男兒なりと曰ふ能はずとて大いに千葉縣人を激勵し、次に代議士板倉中氏は醫治の前に攝生せよと題し疾病を自から氣付きて醫治を請ふは既に大いに身体の調節を失なひたるものなり故に醫治の前に養生せざるべからず近頃我が政治界にも此の病氣に墜りしものあれど(日糖事件等を指す)幸ひに板倉中は養生せし爲め其の疾患に墜らざりしと劈頭に大喝采を博し置き朝鮮人の懶惰を渡邊韓國大審院長の談を引き韓國人は食物の有の食をる副は働らかず食物盡くれば働さ出す一日働いて三度爲すより其勞働を減じて一日二食乃至一日を忍ぶまで懶惰性は病ひ膏盲に入れり此の原因は韓國政府の請求に基くもの多しと述べ其一例として朝鮮には國王が官職を買知事や郡長を五千圓乃至一萬圓にて賣るなり官職を買うて知事郡長となるや其の買入代金の理合せを爲すべく知事や郡長は人民より金錢を強請す日本には憲法により我々に参政權を與へられしもの之れを大切にせざれば猫の小判の感あり我が國民にして選任の

は二十も三十もあり三十ありとして其三十の中一二が完きかといふに三十か三十とも未だ駄目なり之れを纏めて考へなば身体を健康にすること、生活の安全、精神の向上するに在りて尙風會の目的實に此に存ず則ち我々は傳道の野心などで本會を興したにはあらざりて宗教家といふものは寺を建てたり信徒を擴張したりするは抑も末て宗教家の本領にあらざ(拍手)我々が此に出席したるも求むる所あるに非ず與へむとして來れるもの也而かも本年八月より尙風會の講習所を東金町に開設し尙事項につき實地の講習を爲さしむる等なりとて人間の救済を宗教の本領なりと耶儒二教をも援きて縱横に雄辯を揮ひし處、人をして日蓮の面影を偲ばしむるものあり次に醫學士千葉彌次馬氏は煙炭肥料によりて一粒より四十に升葉せし大麥小麥を携へて其効果の偉大なるを説き千葉氏の自邸より噴出する瓦斯を點じ長生郡の一帶の地は地下百四十三間を堀らば瓦斯を噴出す石炭も新材も盡くる處あるも瓦斯は無盡蔵なりと説きて大喝采を博し次に文學博士白鳥庫吉氏は戊申詔書に就てと題し戊申詔書は種々に解釋せらるゝも歴史上より見て日本より立派なる國民はあらざ其華を去り實に就きては西洋文明の皮相に迷ひ日本固有の美風を消耗するやに軫念あらせられしもの也又詔書を節儉といふに解釋してはならぬ有益の事業例へば千葉氏の瓦斯及煙炭の如きは有益の事業なれば資金を投じても爲すべく公共の事業には大に捐金し盡力すべき事に

權利を賣却するとしたらば如何(投票を賣るを指す)(拍手)而して選任されしものが朝鮮の知事や郡長と同じく其價を取り返す事を爲したらば如何(議員收賄を指す)(拍手)其れより憲政創立の第一勳者板垣伯の風俗改良に入り伯は風俗改良を爲さざれば立憲政治は駄目なりと看破し板倉中氏等が伯を樞密顧問官に爲し伯を財政の困厄より救はんとせしも伯は顧問官の顯職に在りては風俗改良事業を爲すに不便なるを思ひ其推選を固辭したる始末を述るに至りては春峰氏の辭辯沈痛を極め聽衆中の舊自由黨員等をして涕泗滂沱たらしめき次に本部の幹事岩佐孝治氏は知事及中川書記官の出席なかりしは招牌に偽りある如くなれども有吉知事も中川書記官も地方官會議あるも今九日は日曜なれば出席出來得べしといふに因り其れを公けにしたる次第兩氏の不出席には不満足なるべくも更らに諸君より満足され感謝さるべきものもあり即ち石井外務次官、白鳥博士等の出演はれなりと演べ(拍手)次に大指正本多日生師は郡の尙風會に關する所見と題し大指正は先づ自己が尙風會發起人の一人たることより尙風會の性質目的を簡叙し社會は宗教家を固陋なりとするも宗教家は却りて社會が宗教家を解せざるを怪しむ位ひ元來宗教家と教育家とが一致して活動するに非ずむば疎な仕事は出來ざるもの也尙風會につき茂原地方の宗教家が反對を爲せしも开は其宗派の僻見に過ぎず僧侶の本領は世を救済するに在り之れに關して爲すべき仕事

解釋せざる可からずと説き大拍手聲裡に降壇するや外務次官石井菊次郎氏は所感と題し先づ白鳥氏と同じく公務多忙にて歸里を省する能はざりしが此の機會に於て九十九里の空氣を吹ひ同郷の諸君にお眼にかゝるは大に喜ぶ事なりと挨拶し其れより世界の大勢より移民成蹟の良好なるを叙し世界列國の競争は競馬の先きを争ふ如く猛烈なる以上は大に國本を培養せざる可らず而かも内國本を培養しつゝ外に向つては即ち海外發展を爲し大に世界の遺利を收めざる可からず日本人の足跡今や實に世界隨處に即せられ在米日本人は十萬人を算し在布哇は七萬人を算せるの好況也近頃輸入超過につき心配するものもあるも奢侈品外の輸入超過は憂ふ可らざるも奢侈品の輸入超過ある今日の有様は憂ふべしとし亞米利加あたり一州一國の尙風會の如き組合の申合せとして酒を賣るを禁じ煙草を喫するを禁じたる處あり斯の如き州に於ては學生等の身を誤ることなし日本人も亞米利加人の勇氣を以て尙風に從事せざる可らずと論じて大拍手を買ひ次に有吉知事代理佐倉中學校長山内佐太郎氏は「尙風の生命」と題し東郷平八郎氏の誠意と書せし額面を左方に掲げ(山内氏所有)中央に勅語の圖解を掲げ、右方に古之欲明明、德於天下者先治其國、欲治其國者先齊其家、欲齊其家者先脩其身、欲修其身者先正其心、欲正其心者先誠其意、欲誠其意者先致其知、致知在格物と大學の文字を掲げ東郷大將の誠意の文字の出所は此に出でたるものに

て教育勸語の御趣旨も此大學修身齊家に同じきものあるを説き、説いて人生の目的、宇宙倫理の根本を細論し是れ又大拍手聲裡に降壇するや本縣技師森島虎壽氏は「煮干庵の改良」に就てと題し、爾煮干に於ける從來の癥は不經濟なり改良應なれば薪に於て倍の利益時間に於て三割の利益あり殊に從來のは煙と共に有益なる炭素を逸せしむとて是れ又圖解を以て説明し斯業者に多大の感動を與へたり次ぎは牧師青木律彦氏登壇の順序なりしも時間なかりしを以て遺憾ながら「時代と人格」なる題下に氏の雄辯を聽くこと能はずして午後六時開會當日の聴衆は千餘名にて本部よりは岩佐春治氏専ら會務に幹旋せられ支部の發會には中村彌一郎、市原鍊三、吉野朝吉、佐野清二、吉野忠吾、渡邊弓太郎、平野勝三郎、井上稻直、金綱亟、渡邊徳松、梶銀蔵、池田良江の諸氏にして既記の外來會者の重なるもの、渡邊部長代理某氏、元代議士高梨正助、吉野傳治、元縣會議員池田愛三郎、加藤茂原農學校長、鈴木圖書氏等なり

尙風會木更津支部發會式

豫記の如く千葉縣尙風會木更津支部發會式は去十六日午後二時より君津郡木更津町即會議事堂に開會したり今其模様を略叙せむに元郡長大野道一氏發會式の辭を述べて戊申詔書を捧讀し岡郡長は恭謙惺惺の題下一場の演説を爲すべき筈なりしも開會時刻は降雨の爲め

一時間遅れしを以て時間をば他の辯士に譲るべく身を以て恭謙の徳を示して簡單の挨拶に止め次ぎに講師の最初のものとして本縣技師山本竹藏氏登壇し昨年十月長野共進會に於ける所感を語りぬ其の要に曰ふ長野縣は尤も教育に秀てし處也小學校の教員に五六十圓の多額を支拂ふの土地也然れども長野縣は山間の土地にて蜂の子の熟養や蛙を食する程食物に窮する下々の下等國也雪を分けて田を打つ處也然るに長野縣の教育費は四十一年に於て三十萬圓を費せしに千葉は僅かに二十萬圓に過ぎず海に山に天然物を征服する尤も樂土と稱せらる、千葉は顧みて長野に耻づる處はなきか今長野縣の生命とするものを見るに并は實に生糸なり外國輸出の四分の一は長野にて持ても長野縣の繭價は一ヶ年二千七百萬圓、而して千葉縣生産の重なる米は僅かに二千三百圓、乃ち千葉縣の米は長野縣の繭に如かざる也、拍手起る、千葉縣民は此の樂土の開拓と共に忠實業に服し勤儉産を治むるの必要を説きて更に話頭を轉じ善光寺に到りしとき年齢四十に達せる男が其親なる六十の男を負ふて參詣せるを見て感嘆せし處より孝道は百行の基てふ古語を披きて淳厚俗を成すの勸語に及びて眞摯熱誠に講説し拍手聲裡に降壇するや本縣牧師中最も學識あり最も雄辯の稱あるの青木律彦氏は登壇し「時代と人格」との題下に縱横の快舌を鼓せり氏は先づ尙風會に賛成せし理由より自己の演壇に立ちしは自己の心の奥底に或る物を諸君の心の奥底に傳へんとす

るに在りとし二十七八年戰役の際出征軍人が宿泊せし某寺の住職より款待を得むとしたるに反し冷遇なりしより國家の爲めに出征する我々を冷遇するは何ぞやの間に對し名僧なる某住職は國家の爲めには互様と簡單に答辯せし例を引き同情は要求すべからず同情を要求する此の軍人の如きは陋劣なり吾人は斯の如き陋劣なる心掛を持つまじきなり(拍手大に起る)話頭は急轉して日露戰争後日本が最強の國民たるを自覺すると共に其強所を知ると共に弱處をも自覺せざる可らず、戰爭に於て世界一等國民たる日本國民は一等國としての交際もし体面をも保たざる可らず然るに戦後の財政は如何生活の程度は如何奢侈に流れし結果として輸入超過に於て多くの貴澤品を見るにあらずや上下金錢に窮するの結果黄金崇拜となり成功といふ流行語は多くは金を蓄めることに解釋され大金持になるてん觀念は多くの青年の頭腦を支配するに及び現代の青年中眞面目に哲學や宗教を考究するものなきを慷慨し熱罵は飛むて衆議院の腐敗に及び日糖事件は黄金崇拜の結果にあらずやと大呼し(拍手四方に起る)戊申詔書の喚發は焉に軫念あらせられたるべく尙風會も亦戊申詔書を奉ずるものなれど詔書は勤儉貯蓄をのみ軫念あらせられしに非ずモツツト積極的のもの也金儲けの手段は教へざるも多くの人既に之れを知る詔書の華を去り實に就きてとは形骸の華を去り實に就けといふに非ずして精神の華を去り實に就けといふに在り(拍手起る)華を去

り實に就く即ち人格が我々の要求する處二宮尊徳流の金儲談の如きは末の末のみ國家の体面國家の健康は人格を措きて何者かある米國は世界の大富國也然れども米人に向つて貴下の國は金持て御目出といふならば、米人は愕然として其無禮を怒らむ若し米人に向つてワシントン、タンコランを有するを祝さば米人は即ち莞爾として其有禮の言に謝せむ話頭は更に轉じて自家の實験して敬服せる某紳士の恭謙にして温情ある言語態度に及びて人格の人を感化するの著明なりし例として英國議員の腐敗絶頂に達し或る問題の爲め議員の凡てが買収せられ満場一致を以て其議案を可決せむとするの際品性高潔なる一田舎議員ボーナラは起て一言「自分は斷じて此の案に賛成する能はず」と獅子吼せし爲め狂瀾は既倒に廻へされ其案は否決となりしや説きボーナラの肖像が今に至つて英國議院の腐敗を監視するを説くや拍手は急激の如かりき、其れより人格の尊ぶへきことボーナラの人格の如き釋迦、基督、孔子の如き、又日蓮の如き人格高きものは千古に一人を見る譯なるも我々日本民族は菅原道真、和氣清麿、楠正成等の血が尙我等血管に通ひつゝあり六百年前に於て日蓮は自己を日本の柱とせり諸君も亦自ら日本の柱石を以て任ぞざる可らず是れ尙風會員の心掛けに非ずやと喝破して降壇するや喝采の聲暫し堂を撼かせり、次ぎは有吉知事代理生濱野校長村岡菊三郎氏登壇せるが氏の熱烈にして興味ある辭辯は青木氏のと當日演壇の双

謂なりき、氏は保護児童と家庭との題下に不良少年の感化に従事せし経験談を語るらく、泥棒癖ある少年も感化教育を施せば立派なる人間となる英國の模範育院院長は泥棒なりしが心機一轉今日に於ては育兒院の恩師として仰がれ居れりと先づ感化の効果如斯のものあるを説きて概語一番「子供の悪いのは親が悪い」と叫び(拍手起る)親が悪くて子供を悪くし之を名けて不良少年といふは惨酷なりと喝破し自分が保護児童と家庭問題を説くには家政に關する事多きに見渡す處婦人の聴衆少なきは遺憾なり爾今は婦人をも多く來會せしめられたしとの希望を尙風會の幹事に希望し元來保護児童(即ち不良年少)の大多數の原因は無教育にて品性の劣等なる母を有す縣下に於ける先々月の調査によるも千葉のみにて兩親親戚隣人等の持て餘す児童は六百十八名の多數なり決して少數とせず君津郡に於ては六十一名あり是れ諸君の題上に擧る大問題に非ずや(拍手)是れ等の兒童の將來は此儘打ち捨て置かば監獄の厄介なる運命を有するに非ずや自分は學校に於て這種兒童を取扱ふ話しは倍々置き家庭側を説かむにウンを云ふ子供は泥棒をする泥棒をする子供はウンを云ふもの也ウンにも種々あり道徳品性に拘はるウンは家庭に於て嚴に戒飾せざる可らざるも道徳品性に拘はらざるものに嚴に叱責すべからず子供は想像と現實とを混同するものなれば夢に叔父が來たといふを現實に來たと間違ふ事あれば也然るに教育なき母親はウンの重大

にて本部よりは岩佐幹事出席し例により萬事に斡旋せられたり

○東京顯本協會の記事

本會は品川正法護持會と聯絡を通じ宣教に努めつゝあるが、六月十二日は品川妙國寺に於て開催し、笹川師は「信仰と行法」を題下に、國友文學士は「信仰」を題下に各熱誠に演説せられたり

六月廿三日は淺草清島町常林寺に於て開催、石川師は「人生々活の風光」國友文學士は「釋迦牟尼佛」笹川師は「正義の光明」關田師は「妙法繁榮の國」を演題の下に統一主義の本領を發揮したる

六月廿七日は品川町妙蓮寺に於て開催、笹川師は「佛道と人道の契合」石川師は「本能主義に就て」關田師は「妙法流布の功果」を演題にて、各自眞摯に研鑽したる所を布衍したれば聴衆の感動意想外なりし

六月廿九日は谷中初音町の本授寺に於て開催、笹川關田の兩師出席せられ、笹川師は「人格完成の教訓」關田師は「佛敎の第一義」を題下に演説せられ、寺主笠原師は劈頭開口、予の大信仰を題下に、自己の爲法求道の精神を告白し、正法傳道の爲に先輩の驥尾に附して身分相應の勤をする事を誓約せられたり、この小寺に住職する笠原師にして尙且この道念を有す、況んや地位名望兩ながら全有する先輩諸師のこの風を見聞して、などて安逸を貪ぼるを得べき、今や顯本の宗風は尊重すべき宗門歴史と俱に光明を放つの際にあり、

と輕微との較量を爲さず其だしきは其微を叱して其大を放任する也實験談の一例として父は養子にて母は家付の娘面して祖父母ある家庭に一孫を擧げたるに其孫の教育は祖父母の専有に歸し父親は一句も我が子の教育に容喙する能はず祖父母死去の後其子は其父親を父として敬せず却つて其れを侮慢したる事を引き慘酷なる繼母の談を引き、更に西洋人の某子供が火を弄びて

失火せしとき其母親は身を以て其火を消し止め失火に驚き顔色蒼然たる子供を臥床せしめ三十分を經て母親は諄々として其子に意見し其子をして弄火の癖を止めし例に至つては辨士熱心の言動其高潮に達し滿堂水を打ちしが如く窓外の雨聲此の時始めて聴衆の耳を掠む氏が拍手聲裡に降壇するや次ぎに本多日生助代理の文學士國友日斌氏は「道徳と宗教」との題下に宗教道徳の異同等を熱心に語り氏の降壇するや時既に五時半山本大佐は殿將として三十餘分間例の快辯を弄して倦怠せる聴衆の情氣を回復し滿堂に活潑なる生色を興へて焉に其講演を了る、閉會後會員有志の宴會ありて散會せしは點燈後二時間を経たる頃なりき、當日の會衆は降雨に拘はらず五百餘人を算せられ會衆の重なるものとして吾徒の肥體せるは木更津裁判所の判事永井次郎畑野健二、淺野謙三、檢事富川宗助、毛賀澤辯護士、元縣會議員石川貞次郎、生實濱野本行寺中村師其他にて支部の發會式に盡力されしは岡巖、大野道一、香々見儀助、露崎銀平、大澤、鈴木、幸崎(町長)其他諸氏

關宗の意氣その如何を卜知するに足る本會の前途轉た慶賀すべきなり(香樹生)

○國友文學士の全國遊化 同師は三上義徹師を隨行とし普ねく全國を遊化して大に教勢を張り、爲宗貢獻の實を擧げんとせらる、その熱誠は傳道の上に二利圓滿の功を成辨せん

○顯本大學林同窓會 顯本大學林同窓會四月例會は十七日午後五時講堂内に開かれ、各級當番生徒七名の演説ありて後關田教授の演説批評及び本化修養談(其二)として「本化的自重心」の講演ありたり△全四月例會は引續きて全月廿四日開催し、當番生徒八名の演説後、

井村教授の「研學の態度」の講演及び關田教授の演説批評ありたり、△全臨時大會、當五月一日より本宗定期議會開催の爲め、大學林出身者にて議員として東上せる者多きを幸ひ全月九日午前九時故浦上教授及生徒四名の追吊法要を兼ね臨時同窓大會を開き、追悼法要修

行後井村教授の「開會の趣意」及び二三の報告、今成同窓會長の挨拶、關田教授の「大學林教育の方針及び信念教育の私見」等の演説ありて後會員一同は生徒の考按に成れる滑稽頌を解くの中に幾多の諷刺を寓したる珍世界及び「日朝上人土牢」の飾物を一巡し、模擬店にて

コーヒー、ラムネなどを喫し、やがて宴會を開き席上生徒總代の謝辭、中村山岡其他兩三師の所感演説及び餘興として生徒の催せる數番のかくし藝福引等ありて午後二時一同歡を盡して散會せり、當日の來會者は

議員其他の來賓にて約四十名程なりき
 ○畿内教信 第十四教區常置布教師たる權僧都文學士
 國友日斌、權中學校鈴木孝碩の二師は、區内各所に巡
 回布教せらる、今其概況を左に報ぜん
 五月一日 奈良縣郡山町常光寺に於て、午後一時より
 演說開會、同地日宗各寺諸師を始め有力者軍人等參聽
 頗る盛況

正信とは何ぞや
 法悦の生涯

鈴木 木 師
 國友 日 師

得益の結果として、同地に天晴會の支部として「地明
 會」を設立することとなり、日宗寺院諸師等これが發起
 者となり、爾後毎月一回例會を催ほし、本部員を招聘
 して講演を聞くといふ、又國友師は奈良に開催する宗
 教書研究團體の需に應じて、追て「法華經より見たる
 繪畫論」の講演あるべしといふ、今回布教師の一行に
 對し前記諸士等大に歡迎せられたり

五月二日 大阪市生玉寺町堂閣寺に於て午後一時より
 説教あり、同地蓮成寺梶木日種堺妙滿寺三好信道師等
 も參加せられ、又同夜八時より演說會を開く、同夜聽
 衆滿堂頗る盛況

開會の詳
 勸信一則
 信仰に就いて
 三大秘法
 道の標本義

古谷 寺 主
 三好 師
 鈴木 師
 梶木 師
 國友 師

國友師は先づ家庭、國家、社會及び宇宙に於ける道を

説き、進で人生觀宇宙觀佛陀觀に及び、信仰の生活に
 入り法悦を有してこそ始めて忠孝博愛信仰の道を完ふ
 することを得べき旨を説かる
 五月三日 堺市妙滿寺に於て、午後一時より説教あり
 同夜は演說會、是れ亦盛況

心の師となるをも心を師とせされ

鈴木 木 師
 國友 日 師

鈴木師は「天照らず佛いますと知るならば、只朝夕に
 うれしはづかし」我が心鏡にうつるものならば、さぞ
 や姿のみにくからむ」等の意を述べて最後に信仰の
 徳を挙げ、華經を以て修身修養すべき旨を訓へらる、
 次に國友師は、時間空間を通ふして人類の總ては皆宗
 教心あり、宗教を有し、信仰を有す、參聽の諸士も信
 仰を有するや勿論なり、然るに之に教ゆるに人身觀、
 罪惡觀、佛陀觀等を以てし信仰を起すべしと説くは、
 教導の方法大に誤されるなり、今予は諸士が有せる信
 仰の誤されることを指摘し、誤される信仰の恐るべき
 害毒を詳説して諸士を戰慄せしめ、又更らに諸士の有
 せる信仰に缺けて足らざるものあり、そは單に佛陀の
 慈悲惠光等を説き又之れに對する信仰を説くのみにて
 は未だ十分ならず肝要の點を逸せり、即ち圓慈是れな
 り、圓慈とは人身觀に於て佛性（佛性とは涅槃經に、
 一切衆生の慈悲心を佛性と名く）と佛陀觀に於ける慈
 悲中心智慧力用の佛陀との感應道交を指して圓慈とす
 この圓慈にそ信仰に肝要なりと述べらる

かくて翌四日は一行大阪に歸り、全夜堂閣寺に於て慰
 勞會を開き主客歡を盡くして茲に奈良大阪地方の巡教
 は終結しぬ、此行大阪堂閣寺主古谷養眞師を始め同寺
 總代松田平治郎、相馬小馬三、濱中安治郎、吉本駒吉、宮
 崎彌三郎、井上重次郎、川口常吉等の諸氏最も幹旋盡力
 し、就中全寺信徒小野辰藏氏と大塚榮太郎、山崎重太郎
 氏は特に會場の整備に努められたるは奇特のことにこそ
 ○日蓮主義 と題する月刊雜誌は鎌倉栗山の獅子王文
 庫よりその初號を五月六日發刊せられたり、近來日蓮
 上人の主義人格にあこがれてその面影に接せんとする
 國民がその自覺を呼び起すの時に方たり、この雜誌の
 生きたるは上人に接觸せんとする人のために好箇の
 磁針なり、求道の士の一讀せらんことを慫慂す

▲京都通信

京都天晴會發會式 東都知名に依て天晴會組織せ
 らる、や各地其影響を受けて日蓮聖人研究の聲益々盛
 んなるの時我西都にも亦其聲を擧げたり、去る五月三
 十日午後五時より洛東圓山公園也阿彌ホテルに於て發
 會式を舉行せり、來會者は本山よりは野口部長田上寛
 靜、銀井、鈴木、川崎師出席せられ其他京都帝國大學
 文科大學教授幸田露伴氏、同理解學博士橫堀氏、辨護士
 高木氏、金子彌平氏、梅室榮太郎氏、土屋岩倉病院長
 獅子王齋館主原志免太郎氏、子守學校主中村寛澄、中
 外日報社山岸去水師等にして一同和氣霽然たる内に曉
 餐を喫し、それより幸田露伴氏は立つて文章上より日

蓮聖人及法然阿流の文章とを比較して有益なる講演あ
 り、それより高木辯護士、土屋病院長、原志免太郎、
 梅室榮太郎氏等の所感演說あり續て議事に入り山岸去
 水氏幹事に當撰し、幸田露伴、野口養禪師を評議員に
 撰び十一時過ぎ解散したり

富永東一郎氏逝去 京都成就院信徒惣代たる同氏は
 非常なる篤信家なりしが今春巴冬病魔に冒され遂に五
 月五日五十九才を以て逝去せられたるは誠に愁腸の事
 と云ふべし葬儀は去八日本山に於て執行し田上日篤師
 の印導川崎英照師の歎徳等にて會葬者六七百名ありし
 ○天晴會主催の夏期講習會 緣陰に清風を迎へ青松白
 砂の海濱に心魂を洗ふは、常夏における唯一の快樂な
 り、鎌倉附近は東海における勝景の地にして、加ふる
 に活ける歴史の趣味を有する所なり、本年七月廿一日
 より向ふ十日間、この形勝の地たる片瀬瀧口寺を會場
 として當代の明星十數名講師となり、各自が該博なる
 識見を發露せんとせらる 講題其他の規定は別項の廣
 告に詳なり、近來我が國民が自己天稟の國民性を自覺
 し、完全なる國民性を發揮したる偉人を渴仰せんとす
 る趨向あるの時に當たり、日蓮續仰を標榜せる天晴會
 がこの大講習會を開催せるは機宜に適中したる思ひ起
 ちにして、各講師が至誠と熱烈の講話は必らずや世を
 補益する深大なるを、記者は雖かく信ずる所なり、求
 道の士行いて甘露の淨味を嘗めて心靈修養の効果を收
 められよ

天晴會 主催 夏期講習會
特志義助金芳名錄

(第壹回)

一金拾五圓也(即納)	本多日 生殿	一金壹圓五拾錢	松田 宏 榮殿
一金五圓也(即納)	今成乾 隨殿	一金壹圓五拾錢	山田 日 廣殿
一同 (即納)	山根日 東殿	一金壹圓也	笠原 琢 瑞殿
一同 (即納)	關田養 叔殿	一金五拾錢(即納)	吉田 日 宣殿
一同 (即納)	井村日 成殿	一金貳圓也	安藤 日 莊殿
一金參圓也	鈴木日 雄殿	一金壹圓五十錢	伊保内 教 精殿
一同	笹川真 應殿	一金壹圓也	金坂 義 昌
一同	藤崎通 明殿	計金六拾九圓也	田島 義 潤
一同	里見日 潮殿	右ハ天晴會主催ノ夏期講習會ニ對シ多大ノ贊助ヲ與ヘ	川崎 泰 秀
一同	吉田義 着殿	ラレ前記ノ金額喜捨セラレ候御芳志ハ取扱ヒ候本團ノ	森本 真 良
一金貳圓也	飯倉日 和殿	榮トスル所ニ御座候 敬具	
一金壹圓五拾錢	田井日 晃殿		
	大須賀 玄 遊殿		

統一團

圖書館の設立 (詳細は次號の統一に掲ぐ)

宗教に、教育に、健全なる思想を涵養し強健なる國民を作るは、國本培養の根元なり、不肖此に感ずる所あり、圖書館を設立して品性修養智能啓發の一助に供せんとす、世の仁惠ある人士同情を垂れてこの舉をして永遠に光あらしめられん事を祈る

- 一本館に蔵蓄する書冊は汎く社會百般の著書を吸収せんとす
- 一特志寄贈の書は保管を嚴重にして永くその芳情を残す事に遺漏なからしむ

設立者 本行寺住職 **中村 乾 信**

千葉縣千葉郡生實濱野村

日蓮聖人の實歴

全 壹 冊

吾人は日蓮聖人の主義擴張の爲に百萬の味方たる本書を編せんとして博文館に交渉の結果漸く製本し得るに至れり其内容は聖人の主義と人格を緊密切に論明して近時聖人尊重の思潮を喚起したる高山博士の四大文章(況後録、月蓮上人とは如何なる人ぞ、日蓮と基督、日蓮上人と日本國)と聖人の自傳的遺文を合輯したるもの聖人の傳と教義を簡明に知らしむべく學校役場等中流人士に施本して絶好なるは勿論國家||人生||眞佛の關係と價値を解せんとする者が必ず一讀すべき良書也

希望者は實費拾五錢(郵券代用貳拾錢)を送られよ特に數千百冊使用者の照會を俟つ、妙道宣揚邪法廢滅の爲に.....

岡山縣勝田郡飯岡村

本經寺 高田 日暢

改名日主

野口義禪

顯本法華宗要品

▲從來頭興し來りし上製並製其品切れに付御要求に應じ難く候
▲新製擬白仙花緞子表紙の分、一冊郵税共金拾七錢(一切割引なし)前金の事
此分は何百部にても着金次第直ちに發送可仕候
東京淺草新谷町一四
慶 印 寺

製本出來

文學博士 姉崎正治君序文
大僧正 本多日生師 著

聖語錄

本書の價値は今更贅言を要せず既に世の鑑識家の認むる所出版以來已に二版賣切れの盛況を呈し諸方渴望家の需に應ずる能はず候所今回第參版製本出來致候

東京府荏原郡品川町
統 一 團
東京市京橋區南傳馬町三丁目五番地
須原屋書店
振替貯金口座東京四九六〇番

發行所

發賣元

日蓮讚仰 天晴會夏期講習會

龍口寺 一、期間

來ル七月廿一日ヨリ全三十日迄十日間

一、會場

相模國鎌倉片瀬

一、講師及講題

- ▲日蓮上人の特長.....顯本宗管長 本多 日生師 ▲日本文明史上に於ける日蓮上人の地位.....文學士 小林 一郎氏
- ▲海上歴史と日蓮主義.....子爵 小笠原長生氏 ▲鎌倉時代と日蓮上人.....東洋大學教授 境 野 哲氏
- ▲先哲餘香.....日宗布教院長 脇田 堯惇師 ▲法華經に就て.....文學博士 姉崎 正治氏
- ▲未定.....妙宗主筆 田中 智學氏 ▲未定.....文學博士 三宅雄次郎氏
- ▲日蓮上人の文學.....日宗大學講師 高島平三郎氏 ▲日蓮宗の名稱に就て.....唯一佛教主筆 清水 梁山氏
- ▲未定.....僧正 野口 日主師 ▲四個格言の大意.....日宗大學教授 清水 龍山氏
- ▲日蓮上人の女性觀.....村妻婦人主筆 松森 靈運師

科 外

▲未定.....顯本宗大學林長 今成 乾隨師 ▲未定.....文學博士 三上 參次氏

其他 數 名

一、會費

聽講料 十日間金壹圓トス但シ學生ハ半減、賄 料 三食及宿泊共十日間金五圓學生ハ參圓

一、申込

出席聽講セント欲スル者ハ七月五日迄ニ東京淺草新谷町十四番地天晴會事務所宛申込ルベシ

天晴會幹事

蓮聖人御遺文講義

〔第一卷〕

明治四十二年六月十日發行

● 郵費 寄附金
● 本入 拾五圓
● 參拾 參拾五圓
● 送拾 參拾五圓
● 料拾 參拾五圓
● 共拾 參拾五圓
● 定價 參拾五圓
● 見金 參拾五圓
● 郵券 參拾五圓
● 謝絕 參拾五圓

目次

- 講義
- ◎ 佐後第一篇
◎ 第二篇
◎ 第三篇
◎ 第四篇
- ◎ 同 土木殿御返事
◎ 同 四條金吾殿御返事
◎ 同 御遺文注疏
- 附錄
- ◎ 御遺文注疏
- 錄内啓蒙(卷一)
- (御遺文、六頁) (完結)
● (御遺文、六頁) (完結)
● (御遺文、六頁) (完結)
- (未完)

● 近時江湖の間に大に揚げられたる日蓮聖人研究の聲に促され其の唯一機關として本講義は發行せられたり

● 本講義は先づ佐後の御遺文より之を開始し、途次卷を進めて竟に御遺文全篇の講了を期す

● 本講義の講師は斯學の蘊奥を窮められたる宗門の老大家清水梁山師にして、其説や穩健にして且つ公平に、決して門流の自他に偏せず、新章亦平易して在俗を問はず阿かなる人にも領解し得らるべきなり

● 本講義は明治四十二年六月十日第壹巻發行、自後引續き毎月十日を期日と定む

● ××印刷の都合あれば見本入用の仁は可成早く申込ざるべし

發行所

振替貯金口座番號東京貳八六六 唯佛一

振替貯金口座番號東京貳貳六八 宗新報社

名古屋市高岳町東區二丁目百三十一番戶

● 佛敎團

(三法堂印目)



佛書表具の元祖
各宗御寺院御入
用品一切何にて
も多少に不限御
注文仰付らるべ
し 佛書は申すに
不及御肖像書專
門
木魚位牌卸小賣

三法堂品發賣目錄(正價付)

- 小包條例附 佛書佛具佛像位牌木魚其種類品有之候を以て
郵券四錢 佛書佛具佛像位牌木魚其種類品有之候を以て
- 注意**
- 目録書を作製致候に付御入用の録書正價附發賣
付被下候は迅速進呈仕候此の目録御用にならば寺
院様方へは御入用其の正札附の品は左の通り
價にて買はれ其の類大般若經一切經理分位牌太
鼓佛書一切過去轉輪經大佛若經一切經香珠數大傘
鉢佛具金物一切釣鐘牛鐘木魚佛子曲餅香天樂
扇三寶鏡手鏡佛眼佛木佛引子佛木佛佛子佛天樂
水板三寶鏡手鏡佛眼佛木佛引子佛木佛佛子佛天樂
て佛具物産なら自由自在(電話二七八三番、振替貯金大坂二〇七二)
- 各宗御山 京都小橋三條 三法堂 藤田總治
表各佛師 東入下小橋 三法堂 陳列場

一 發行期日 毎月一回十五日

一 誌料 一冊金六錢、十二冊前金六十五錢、
郵券代用は一割増、但五厘切手を可とす

一 廣告料 一頁拾圓、半頁六圓、四分ノ一頁三圓
五十錢、特別廣告十五圓ヨリ二十五
圓マデ

一 購讀申込 住所氏名を楷書にて認められたし
一 代金拂込 振替貯金を便とす、拂込用紙は最寄
郵便局より受取られたし、但し此の
場合は誌料の外に金貳錢を振替口座
手數料として餘分に拂込ありたし

明治四十二年六月十五日印刷發行

發行所 井村日 威
編輯人 山根日 東
印刷人 鈴木日 雄
印刷所 北澤活版所

東京府在原郡品川町大字南品川宿四百十二番地

發行所 統一團

(振替貯金番號東京二二一九)

統一

第七十三號